死国

坂東眞砂子

死国

坂東眞砂子

死国

著者／坂東眞砂子
発行／一九九三年三月二十三日　第一刷

発行者／吉森規子
発行所／株式会社マガジンハウス
郵便番号一〇四-〇二三東京都中央区銀座二-一三-一〇
電話　書籍販売部〇三(三五四五)七一三〇
　　書籍出版部〇三(三五四五)七〇三〇
印刷所／共同印刷株式会社
製本所／株式会社積信堂
装丁／大浦一志
© by Masako Bando 1993 Printed in Japan
落丁本、乱丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
定価はカバーと帯に表示してあります。
ISBN4-8387-0426-7 C0093

死
国

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

炎が赤い舌のように揺れていた。蠟燭の灯に、輪になって座る男たちの顔が浮かび上がる。彫刻師が丹念に刻みつけたような、深く険しい皺。高い頬骨、筋肉で盛り上がった肩、張りのある太股。男たちの体つきも顔つきも、どこか似通っている。

そこは暗い岩屋の中だった。湿った岩肌に、重なり合う男たちの影が揺れている。

「もう三か月が過ぎた」

男たちの一人がいった。

「あれの家の桜が狂い咲きしゆうぞ」

「山犬が、おかしげな吠え方をしよったが」

「今年は桃がえらいようできた。別れ作やないか」

男たちの輪から天変地異を告げる低い声が次々に洩れた。話が出尽くすと、声は、岩屋のじっとりとした空気に呑みこまれていった。

「死んだか……」

静まりかえったなかに、老人の声が重く響いた。出入口の方向と向かい合うように座っていた長老たちの一人だった。輪になって座る男たちは、それに沈黙で応えた。

「次は誰の番じゃ」
男たちは互いに視線を交わし合った。首を横に振ったり、頷いたりする影が、蠟燭の灯の中で操り人形のように動いた。
「わしかの」
しゃがれ声が響いて、一人の男がのっそりと立ち上がった。岩屋に吹きこんできた一陣の風に、蠟燭の炎が強く揺れた。皆、押し黙っていた。それが承認のしるしだった。彼は居並ぶ者たちに一礼すると、出入口へと向かった。
外に足を踏み出したとたん、男は、小鳥の囀りに包まれた。木々の逞しい緑が目を射る。そこは小さな神社の境内だった。神社の本殿が、男たちのいた岩屋だ。鳥居の向こうに、山間の小さな村が見渡せる。猫の額のような水田、斜面にへばりつくようにして建つ粗末な家々。村の頭上には、険しい山々が聳えている。猪の牙のような尾根の中で、ひときわ厳しい線を見せて屹立する岩山があった。男は、その山に向かって目を閉じた。
岩屋の中から、呟くような声が流れてきた。彼を送る祈りの声だった。
男は静かに境内から去っていった。

第一部

――かごめかごめ
かごのなかのとりは
いついつねやる――

1

薄暗い駅の構内の向こうに、光に溢れる世界があった。緑の葉の上で、太陽の雫を転がしているような椰子や蘇鉄の木々。白く乾いたビル群の上に広がる南国の青い空。大きな荷物を抱えた帰省客たちがタクシー乗場に立ち、眩しそうに目を細める。

列車の窓辺に頬杖をつき、明神比奈子（みょうじんひなこ）は駅前の光景を眺めていた。こうしていると、子供の頃を思い出す。教室の窓から、家の窓から、心の窓から、いつも外を眺めていた。この暗く窮屈な部屋から、光に溢れる外の世界に飛び出したいと想っていた。もうずいぶん昔のこと。子供時代。大人の世界に出ていく前の、期待と怖れの入り交じった日々。あの頃、外の世界は、胸を高鳴らせるほどの強い輝きを放っていた。しかし本当は、暗く窮屈な部屋だと思っていた子供時代こそ光に満ちていたのだ。優しく包みこんでくれるような、暖かな光に。今ではそれがわかる。

かすかな風に吹かれて、ほつれ毛が舞い上がり頬にへばりついた。比奈子はもの憂げに、それをかき上げた。むっとくるような夏の湿った空気は、暗い駅のホームにまで押し入ってきていた。

「ゆうべ、こじゃんと飲んだがやき」「情けないことというなや、ちっくとならえじゃろ」日焼けした二人連れの男が、怒鳴るような声で喋りながら、列車の前を通り過ぎた。比奈子は思わず微笑んだ。土佐弁。この乱暴で素朴な言葉を聞くのは何年ぶりだろうか。

やはりどこか土佐弁のアクセントを漂わせた構内アナウンスが、中村行き普通列車の発車を告げた。ジリリリリという、けたたましいベルの音とともに、一輛しかない列車は動きはじめた。

比奈子は前向きに座り直した。車窓に沿った長い座席には、客の姿はまばらだ。開け放した窓から、生暖かい風が吹きこんでくる。窓の外に、高知市街が流れ去っていく。比奈子は籐製のハンドバッグから扇子を出すと、ゆっくり煽ぎはじめた。シャネルの〈ココ〉の甘い香りが、周囲に広がっていく。買物袋を足許に置き、友人と話していた隣の女が比奈子のほうを見た。

三つ編みにした長い黒髪。青いリボンを巻いたストローハット。肉感的な体を包む褐色の麻のパンツスーツ。黒目がちで小さな鼻。美人とはいえないが、個性的な顔だち。隣の女は、コップの中に異物を見つけたような表情で比奈子を一瞥すると、再び友人との会話に戻っていった。

比奈子は、自分がこの車輛の中で妙に浮き上がっていることに気がついて、扇子を動かす手を止めた。そして息をひそめるようにして、また窓の外に目を遣った。列車が進むにつれて、雑然とした町並みに少しずつ緑の水田や山が入りこんでくる。真新しい団地やマンション。宅地造成のために切り崩された赤茶色の山肌。けばけばしい色のドライブインの看板。比奈子の実家のある千葉県の田舎とさほどちがわない景色が続く。ここにも都市化の波が押し寄せていた。

仕方のないことだ。二十年前と同じ光景が残っているはずはない。そう思いながらも、比奈子は少しばかり幻滅を味わっていた。

矢狗村(やくむら)はどうなっているのだろう。

彼女は、険しい四国の山並が続く列車の行く手を見遣った。

矢狗村は、比奈子が小学校時代を過ごした土地だ。中学校に入る前、機械技術者の父親の仕事の関係で関東に引っ越した。その一年後、村に残っていた祖父が死んだ。一人になった祖母は、長男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

である父の許に身を寄せた。以後、たまに墓参りに矢狗村へ帰っていた祖母だったが、十年ほど前から一人旅はできなくなっていた。父の兄弟も、今では皆、高知県外に住んでいる。明神家にとって、矢狗村は遠い土地となってしまった。

埼玉から千葉へ。住まいを変わりながら、中学、高校時代を過ごした。そしていつしか比奈子の記憶から、矢狗村のことは薄れていった。しかし、こうして四国に戻ると、それは決して消えたのではなく、眠っていただけなのだとわかる。心の底で眠りつづけていた記憶は、列車が四国の山に分け入っていくにつれて少しずつ目覚めてくる。足を泥だらけにして手伝った田植え。川に流しに行った七夕の笹竹。吐息のような光を放つ蛍を追った田舎道。鉢巻きをしめて裸足で走った運動会。

一学年三十人ほどの小さな学校だった。あの頃、一緒に遊んだ友達はどうしているのだろうか。

白鶴のような少女の顔が脳裏に浮かんだ。

莎代里（さより）ちゃん……。比奈子は心の中で呟いた。

日浦莎代里。小学校時代、いちばんの仲よしだった。おかっぱ頭で切れ長の目。色の抜けるほどに白い美しい子。大人に干渉されるのを極度に嫌う性質だった。一人でいる時は、満ち足りた表情でにこにこしている。その穏やかな顔につられて大人が話しかけたとたん、笑顔はふっとかき消え、無表情な能面のような顔に変わるのだ。莎代里は、近づけば逃げていく鳥のようだった。

動物にたとえていうなら、比奈子のほうは亀に似ていたかもしれない。自分の感情をどう表現していいかわからず、厚い殻に閉じこもっている愚鈍な亀に。

比奈子は、莎代里の白鶴のような美しい姿に感嘆し、大人に媚びない毅然とした態度に、自分もそうありたいと望んだ。比奈子は、莎代里の後を追うように山を歩き、川辺をたどり、花を摘んで遊んだ。彼女のそばにいると、なぜか楽な気分でいられた。黙っていても、つまらない子だと非難

されることもなかった。それは莎代里も同じだったにちがいない。「川に行こうか」とか「お腹、空いたね」というような、短い言葉を口に出すだけで事足りた。誰かが嫌いだとか、父に叱られたとかいうことを洩らしはしても、話はそこで終わってしまった。慰めたり、自分の意見をいったりするような、複雑な会話を交わすことはなかった。

比奈子の母は、いつも「莎代里ちゃんとあんたは似た者同士やね」といっていた。しかし比奈子にはわかっていた。二人は決して似てなどいなかった。感情を表すことが下手というところで似ていたにすぎない。

はっきり覚えているのは、莎代里の家で飼っていた猫が死んだ時のことだ。二人は、前の夜から帰ってこない猫を探し歩いていた。道路脇に横たわる灰色の小さな塊を最初に見つけたのは、莎代里だった。二人は走り寄った。探していた猫だった。頭も尻尾も生きていた時と同じように、ふわふわした毛に包まれていて、寝ているようだ。しかし胴体が半分ほど欠けていた。鳥か野犬に食われたらしく、内臓がごっそりなくなっていた。黒ずんだ肉の間に細いあばら骨が見えた。

比奈子は息を呑んだ。猫の前にしゃがんで泣きじゃくっている莎代里の背後で、比奈子は立ちすくんでいた。かわいそうというよりも怖かった。小さな死骸は、地の底から湧いて出た化け物のように思えた。比奈子は、その場にいるのがたまらなくなった。

「莎代里ちゃん、おばさんにいいに行こう」

しかし莎代里は首を横に振って、そっと猫の頭を撫でた。いとおしげに灰色の尻尾に触れ猫の名を呼んだ。やがて立ち上がると、猫の頭と尻の下に手を差し入れて持ち上げた。肉の食いちぎられた胴体がだらりと垂れ下がり、そこから黄色に濁った体液が滴り落ちた。莎代里は自分の手が汚れるのも気にせずに死骸を道端に運ぶと、草の上に横たえた。

そして近くの棒を拾ってきて、穴を掘りはじめた。茫然としている比奈子に、莎代里は墓を造るのだといった。

「きれいなお墓にするがよ。丸い土を盛って、石を並べて。お花やお魚を供えるところもちゃんとあるがで」

莎代里は、それがどんなに美しい墓になるか語った。その様子は、愉しそうですらあった。猫の死はすでに頭から消え、墓を造るという考えに夢中になっていた。

その時比奈子は、自分の考えていることと莎代里の考えていることはずいぶん違うのだと、おぼろげながら理解したのだった。絹と麻が異なるように、魂の肌ざわりが違うことに気がついたのだ。

お互い内に潜むものが違っていたからこそ、仲がよかったのだろう。しかし引っ越して以来、簡単な手紙を数度やりとりしただけで、連絡は途絶えた。たぶん二人とも、文字や言葉で感情を伝えるすべを知らなかったせいだ。顔を合わせていれば、同じ時を重ねていれば、感情を伝え合うことができた。しかし遠く離れて別々の人生を歩むようになると、二人は別の世界の人間になってしまった。

祖父の初盆で、両親とともに最後に矢狗村に帰ってきた時も、比奈子はその足で莎代里を訪ねた。二人とも中学一年生になっていた。だが、ひと言ふた言、言葉を交わすと、もう何をいっていいかわからなくなった。二人は、はにかみながら向き合っているしかなかった。言葉によって離れていた時間を埋め合わせることができるほど、大人にもなっていなかったし、言葉なしで満たされた気分になれるほど子供のままでもなかったのだ。

大人になり、比奈子はイラストレーターとして絵という手段で他人に感情を伝えるすべを身につけた。言葉を使うことも上手になったと思う。人類が道具を使いこなすことで進歩してきたように、

比奈子も言葉という道具を使いこなして、外の世界に出ていくことができるようになった。莎代里は、どんなふうに感情を伝えるようになっているだろう。どんな女になっているだろうか。今、あの鶴のような莎代里をつかまえて、その心の内を見つめたら、自分との違いがわかるだろうに。子供の自分ではつかみきれなかった、二人の魂の違いがわかるだろうに……。

「きゃあああっ」

甲高い子供の声が、比奈子の思考を引き裂いた。車輛の前のほうから、小さな男の子が笑いながら飛び出してきた。

「おい信春っ、走ったらあかん。こけたらどないするんや」

派手な半袖シャツを着た男が座席から腰を浮かして、子供の後を追いはじめた。男の子は比奈子の前でよろめいた。比奈子はとっさに手を差し伸べた。子供は彼女の手にすがると、にやっと笑った。ふてぶてしい子供だと思って、比奈子は手を放した。

「すんまへんなぁ」と大きな声でいいながら、父親らしい男が近づいてきた。後退しかかった額の髪にゆるやかなパーマをかけた、細身の男。突き出した額が、目の前の子供とよく似ている。

記憶の壁を、何かがひっかいた。

子供ではない。別の誰かに似ている。

息子の手を引いて戻ろうとする男に、比奈子はおずおずと声をかけた。

「あの……あなた君彦君?」

男は怪訝な顔で振り返った。

やはりそうだった。島崎君彦。つるりと出た額のために、小学時代はデコキンと呼ばれていた。比奈子を思い出せないらしい君彦に、彼女は自分の名前を告げた。君彦は大きな声をあげた。

「比奈子ぉ？　嘘やろ」
彼は、比奈子をじろじろと見た。
「そういわれりゃ、比奈子やなぁ。けど、ごっつう変わったさかい、ちっとも気ぃつかへんかった」
君彦は、大阪弁の混じった言葉で大仰に驚いてみせた。
「二十年ぶりだもの。仕方ないわね」
そういいながらも、確かに変わったにちがいないと思った。
子供の時の写真は見たくない。臆病そうな目つきでレンズを見ている、もっさりした子供。それが比奈子だった。
「ほんで、今、どこに住んでんのや」
「東京よ」
「結婚して？」
比奈子は心に突き刺さる棘を感じながら、結婚はしていない、と答えた。三十歳を過ぎてからは、あまり耳にしなくなっていた質問だった。彼女は、あれこれ聞かれる前に、イラストレーターをしているのだと答えた。君彦はますます驚いた顔をした。
「カタカナ職業やな。かっこぇぇやんか」
「そんなことないわ」
謙遜しながらも、最近手がけた大手企業のポスターをいえば、君彦も知っているだろうと思った。
比奈子は〈ＨＩＮＡ〉というペンネームで、イラストレーターとしてはけっこう知られていた。
――きみを見つけたのは俺だぜ――

男の声が頭の中に響いた。比奈子は無意識のうちに扇子を握りしめると、君彦に聞いた。
「それで君彦君は何してるの？」
君彦は、もみ手をしながらいった。
「大阪で細々と商いをやってま。大阪商人でっせ」
比奈子は笑い声を洩らした。君彦は昔から同級生を笑わせることが上手だった。
「大阪に住んでるの？」
「そうや。お盆で帰ってきたとこ。比奈子こそ、なんで高知に？」
仕事に疲れたから。恋人から逃げ出したかったから。子供時代が懐かしくなったから。比奈子の脳裏にさまざまな理由が浮かんだ。彼女は、最もあたりさわりのない言い訳を選んだ。
「家のことでね。私の家、まだ矢狗村に残っているの。ずっと人に貸していたんだけど、今度、その人たちが出ていくというので、家の状態を見に帰ってきたわけ」
「一人で？」
「うん。私が全権大使。また人に貸すか、改築するか、売るかを決めるの」
君彦の子供が、母親の許に戻るとむずかりだした。君彦は息子の尻を叩いた。
「ああ、行け行け。おとなしゅうしとくんやで」
よちよち歩いていく子供の後ろ姿を眺めながら、比奈子はいった。
「君彦君も、もう立派なお父さんね」
君彦は照れ臭そうな顔をした。
「もう三十三や。俺だけやないぞ。みんな、ええおっさん、おばはんや。豊は家業を継いで農業やってるし、恭三は農協勤め。ゆかりは藤本商店に嫁いだし……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com